モンスタープラント

モンスタープラント（monster plant)。怪物植物と称されるこの生き物は、巨大な肉食植物（イーター)。まるでワニのような大きな口の中には無数の鋭い歯が並んでいる。
高さ約４メートルの本体は移動できないが、自在に操れる無数の蔦（つた）は数メートルもの長さがあるため、その圏内に入った獲物を絡めとってしまえる。

暴れる獲物のアナルに触手を突っ込み、興奮剤溶液を注ぎ込む。性的快感を強制的に与えつづけ絶頂状態にして動けなくしてから貪り喰うモンスターである。

【第１話】

とあるジャングルに植物学者の一団がやって来た。日本から来たこのチームは皆１８～２４歳の若い女性のみで構成されている。高校卒業したての新人から大学院生までいる。新種の植物が見つかったことで、彼女らはこのジャングルの奥地で研究をすることとなっていた。

彼女らは到着すると、現地スタッフと合流。現地スタッフも同年代の若い女性たち。親近感もあってか和気あいあいとした雰囲気で打ち解けていく。が、ここは奥深いジャングル。危険についても話がなされた。

そう遠くない場所で若い女性たちが何人も行方不明となっているとのこと。ワニやヒョウといった肉食獣に襲われた可能性もあるが、原住民のしわざではないかとも噂される。

このジャングルには原住民がいた。未開の地であることもあってまだ分かってないことも多く、若い女性しか確認さ

れていない。彼女らはいつも裸で生活しており、我々からすると原始的な謎の存在といった印象。

また、体格が良い。平均身長は１７０cm を超え、豊満な身体をしていた。乳房や尻が大きいだけでなく、筋肉質でもある。彼女らは自ら槍や弓矢をつくり狩りをする。

時にはワニやヒョウなどの猛獣すら仕留めて食べてしまうことから、その身体能力の高さがうかがえる。

が、そのことから人喰い部族なのではないか？という疑念まで生まれ、行方不明者が出た際に疑いを持たれてしまった。だが、確たる証拠はなく、あくまで噂の域を出ない。

そんな話はさておき、さっそく新種の植物の研究が始まる。研究室に運ばれた小さなメロンのような果物。とても甘くて美味しいのだが、あまり食べ過ぎてはいけないとのこと。中毒性があり人体にとって刺激物となる『オナニウム』という成分が入っているらしく、これを摂取すると激しく性欲が刺激され自慰行為を始めてしまうという。

自らの意思で抗うことは難しく行動が制御できなくなるので、もしその瞬間を猛獣に狙われでもしたら逃げることができない。

が、この季節ここでは普通に手に入り、なおかつここはジャングルの中とは言え研究所（人工的な建造物の中）なので、安全な場所であれば少量を口にするのは良しとされた。むしろ研究の一環として、まずは自分で食べてみて、体感・実感してみてほしいと言われ、彼女たちは１口づつ食べてみた。とても甘い。そして美味しい。味としてはメロンに近いが、もっともっと濃縮された甘さであった。

そして間もなく湧いてくる性欲。皆ムラムラとしてきたが、人前でオナニーをするわけにもいかず平然とした表情を保ち我慢する。

「１口でこんなにも感じるのか・・・たしかにこれをたくさん食べたらヤバいかもな・・・」

と誰もが思った。もちろん、口には出さないが。そして研究

は進み、数日もすると果実のサンプルが足りなくなった。十分な量を採取していたはずだが、皆がたくさん食べてしまっていたのである。

誰も口には出さなかったが、皆心の中では「なるほどね～」「みんな私と同じことしてるんだな」と思っていた。皆それぞれ、こっそりと食べてはこっそりと自慰行為にふけっている様子。

現地スタッフの１人はサンプルを新たに入手するため、ジャングルの奥地へと出かけた。「１人では危険では？」と心配されるも、「慣れてますから」と微笑んで出ていった彼女だったが、この１９歳の少女が帰ってくることはなかった・・・

研究所を出た彼女はいつも果実を採取している場所へと向かった。ジャングルの奥地にあるその場所には、例の新種の植物が生えていた。高さ４メートルほどの大きな植物で、

直径も１メートルほどはあるであろうか。その頂点には赤い花が咲いている。

太い幹からは何本もの長い蔦（つた）が伸びていた。これまた長く、５～８メートルほどはありそうな巨大な蔦。下部からはしっかりとした根が広がっている。地下にも伸びているであろう根は地上にも広がっており、そこに無数の果実が成っていた。

現地スタッフの少女はそれらの果実を採取していく。彼女もこの果実が美味しいのは知っている。中毒性があり食べ過ぎては危険なことも知っている。「まぁ、一つぐらいは大丈夫だろう」とかじってみる。とても甘い。メロン果汁が濃縮されたかのような甘みが口の中に広がる。

そしてすぐにムラムラとした感覚が身体の奥底から湧いてくる。普段ならここで我慢するところだが、あろうことか２口目、３口目とかじりつき、果実を丸々１つ食べてしまった。油断である。性欲はどんどん膨れ上がっていき、ついには我慢できずオナニーを始めてしまう。

服の上から乳房と性器をまさぐっていた彼女だが、そのうちショーツを下ろしブラジャーも外し、自慰行為に夢中になっていく。彼女の身体からは汗とともに強い体臭が放たれていく。その匂いに強く反応した捕食者がいた。果実を餌として用意し獲物がかかるのを待っていた、すぐ背後にそびえる巨大な植物である。この植物こそが捕食者（イーター）であった。

自慰行為に夢中になり周りが見えなくなっている獲物の背後で、食肉植物は無数の長く強靭な蔦をうねらせる。そして突然その蔦が獲物へと襲いかかる！

何本もの蔦が雌肉の身体に巻きつき捕える。ここにきてようやく、少女は異変に気づく。身体に巻きついた蔦を振りほどこうと暴れる少女。だが、なかなか外れない。意思を持っているかのような蔦はどんどん少女の身体へと巻きついていき、動きを封じていく。

が、なおも暴れる少女。植物の方も捕らえた獲物を逃すまいと、少女の身体を空中へと持ち上げていく。地面から足が離れた少女は、空中でバタバタともがく。もがきながら

も食肉植物本体の方へと運ばれていく。

そして少女の目の前で、食肉植物は巨大な口を開ける。まるでワニのような巨大な口の中には、無数の鋭い歯が並んでいた。そのおぞましい姿に絶叫する少女。自分が餌として捕らえられたことをようやくここで理解する。泣き叫びながら激しく抵抗するも、空中にぶら下がった状態では逃げることは出来ない。

が、イーターとしてもまだ、この暴れる獲物を食べるには元気過ぎるようで、大人しくさせたい。ワニのような口から、舌のような赤い触手を伸ばしていくとその先端を、露わになった少女のアナルに一気にぶち込んだ。

「ぁっ、・・・」

という悲鳴とも言えない声がもれる。舌のような赤い触手は、少女の尻穴の奥へと潜り込む。そして先端から大量のオナニウム溶液を噴出する。

「はっっぁぁああぁっっ、、、」

言葉にならない声を上げながら、直腸の中に大量の液体がぶちまけられたのを感じる少女。その直後、少女は一気に絶頂を迎えた。電気ショックを受けたかのように、彼女の肉体は一瞬硬直。そして痙攣（けいれん）。

絶頂は収まらず、少女のアナルへと挿し込まれた触手からはなおもドクンドクンと興奮剤が流し込まれる。そのたびに少女の身体はエクスタシーに突き上げられ、快楽に占領される。もはや少女は自分の意思で自分の身体を動かせない。

少女の尻穴からは溢れ出たオナニウム溶液が垂れ流されていく。そして性器からは性液が垂れ流しとなり、失禁し尿も垂れ流されていく。

▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬▬

【第２話】

強制的なオーガズムは長時間に及んだ。少女のアナルへと注がれ続ける興奮剤は、彼女の身体をエクスタシーの世界から逃がさない。快楽に占領された少女の肉体は、もはや自分の意思で動かすことは出来ない。汗まみれになりながら悶え続ける。

最初は声を上げていたが、やがてその力も失っていき、涙とヨダレと鼻水を垂らしながら、その瞳も焦点を失っていく。３０分ほどこの状態が続けられ、少女の身体は消耗し疲れ果て、ぐったりと脱力する。ぐったりとしながらも、なおもわずかに痙攣を続ける。

抵抗する力を完全に失った少女は、もはやただの食肉となっていた。イーターは蔦を使い、器用にこの雌肉から衣服を剥ぎ取っていく。されるがままに裸にされた雌肉のアナルには、まだ舌のような触手が挿し込まれたまま。イーターはその触手を口の中へと戻していく。

それに伴って雌肉も尻を突き出す形で捕食者の口へと運ばれていく。そして獲物の尻肉に喰らいつくと、無数の鋭い歯が柔らかい尻肉に突き刺さる。そして丸裸の雌肉を尻から呑み込んでいく。大きめの乳房も呑み込んでいく。その間も雌肉は抵抗する力は残っておらず、されるがまま。放心状態で視点は定まらず、涙とヨダレと鼻水を垂らしながら、股間からは尿と性液を垂れ流しながら捕食者の口の中へと消えていった。

ご馳走は胃（？）の中へと運ばれる。それが胃と呼べるものなのかは分からないが、動物の胃のように大量の消化液が分泌され、それにまみれる雌肉。さらに、胃の中にはゴツゴツした無数の臼歯のようなものがあり、食べた獲物を咀嚼（そしゃく）するようにすり潰していく。柔らかい肉だけでなく骨もバキバキに砕き細かくすり潰してしまう。

このイーターの胃の中は口の中でもあると言える。食べた餌の味だけでなく噛み応えを感じ、性感帯でもあるので咀嚼するたび快感がはしる。噛めば噛むほど美味しい味が染み出て、唾液（胃液？）と混ざって口の中で味わい続ける。

また胃であり腸でもあるので、消化されると同時に吸収されていく。消化液は獲物の肉のみならず骨まで溶かし、吸収する。そして少女の身体は跡形もなく消えていった。栄養豊富なご馳走を平らげ、満足気なイーター。